

校名：愛知教育大学附属高等学校

所在地：〒448-8545 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

電話番号：(0566)36-1881

記載日：平成28年 5月 6日

記載者：稲澤由以

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

① 愛知教育大学との連携

本校は愛知教育大学の敷地内にあり、生徒は大学図書館や生協を利用して、大学を身近に感じながら学校生活を送っています。大学との連携が強く、6月には1年生全員がグループで大学の先生方の研究室を訪問し、学問に対する興味・関心を高め、物事を深く考える姿勢を身につけます。さらに、大学の先生方から直接指導していただくことで、研究の方策や探究活動を進めるための手がかりを得ています。また、2年生になると希望者は、夏休み、冬休み、そして春休みに、愛知教育大学の先生方の特別講義を18講座受講することができ、大学で学ぶことの意義や学問と生活との関わりについて幅広く考えるようになります。さらに、「情報」の授業においては、愛知教育大学の学生がサポーターとして授業に参加し、個別に支援をしています。



② 校風

昭和48年度の開校時、初代校長が定めた校訓「あたたかい人間になろう、たくましい人間になろう、おおらかな人間になろう」のもと、生徒はのびのびと健やかに、学習活動と部活動に励んでいます。生徒は、とてもまじめで、始業式や終業式では全校生徒がこの校訓が歌い込まれた校歌を合唱し、すばらしいハーモニーが響き渡ります。

③ 特色ある取り組み

本年度、3年生は「総合的な学習の時間」を利用して、主権者としての学習に取り組んでいます。模擬的に選挙公報や選挙ポスターを作成し、政見放送や演説会を経て投票することで、選挙の仕組みを理解し、主権者として積極的に社会へ参加する姿勢を身につけます。

また、国際交流活動として、8月に代表生徒がオーストラリアのメルボルンにあるアイバンホー・グラマー・スクールを訪問し、ホームステイをしながら授業を体験します。1月には先方の学校の生徒が本校を訪問し、本校の授業を体験します。

さらに、平成27年度は、本校の企画が科学技術振興機構主催の「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」に採択されました。平成28年度は、愛知教育大学の先生方の協力で、地域の天然記念物であるカキツバタの保全に関する研究や極地の自然環境に関する研究を行っています。また、陸上競技部の生徒は、生体情報を測定することでパフォーマンスを高める研究を行っています。その他、平成26年度にはユネスコスクールとしての認定を受け、生徒は研究活動をはじめとする様々な活動に取り組んでいます。



貴校の卒業生の活躍状況について：

毎年、ほぼすべての生徒が大学へ進学しています。ここ数年は、卒業生200名の内、国公立大学へは50名前後が進学しています。進学先としては愛知県内の私立大学が最も多く、県外の国公立大学へ進学する生徒もいます。開校からの10年間は、大学卒業後に医療や教育に関する職業に就いている卒業生が比較的多いようでした。また、芸能界で活躍している卒業生もいます。愛知教育大学高大連携特別推薦入試で進学した生徒は、その大半が大学卒業後に教職に就いています。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

愛知県教育委員会との人事交流の協定により、本校の勤務を終えた後は愛知県内の県立高等学校の教員として転出しています。転出者は本校で培った研究や外部との連携のノウハウを活かし、それぞれの職場で活躍しています。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

愛知教育大学との共同研究「高校－大学連携教育システム」を推進して、教職への高いモチベーションを有する人材を早期に見だし、組織的かつ継続的にその志と能力を育み、社会が求める教員あるいは社会人へと育成する方法を探究しています。各学年における活動の概要は次のとおりです。

① 2年生での活動

スクール

愛知教育大学教員による特別講義（長期休業中に合計6日間、18講座、対象は希望者）

平成27年度講義テーマ

保健体育講座	「保健」の授業づくりと保健体育教員 －教員養成大学で焦点をあてたいこと－
数学教育講座	数えること、表すこと
理科教育講座	植物の花色を変える技術
幼児教育講座	音楽を通して体験する子どもの世界
地域社会システム講座	第三人称の死について考える
養護教育講座	「ストレス」について考えよう
国語教育講座	日本語のアクセント
社会科教育講座	「地理」はどのように教えられてきたのか？
学校教育講座	教師を目指すことと教育を学ぶこと
美術教育講座	「図工・美術を教えること」と「図工・美術で教えること」
技術教育講座	形を覚える不思議な金属
日本語教育講座	日本語はあいまいな言語か？
外国語教育講座	なぜフランス語を勉強するのですか？
生活科教育講座	人とのかかりと対話
情報教育講座	インターネットの仕組みについて理解を深めよう
障害児教育講座	特別支援教育を学ぶ
家政教育講座	高齢社会と生活課題－地域社会と生活
音楽教育講座	下から作る音楽

② 3年生での活動

第1回高大連携交流会 6月

高大連携特別推薦入試で愛知教育大学へ進学した学生と志願者との交流会

出願 7月

チャレンジ3

・夏季休業中2日
全24講座の中から入学を希望する講座以外の3講座を受講



チャレンジ1

(出願資格審査)
・夏季休業中2日
小論文及び入学を希望する講座による講義と面接

時間をかけて、愛知教育大学がアドミッションポリシーに合致する人材を発掘

出願資格審査結果通知 9月

特別推薦入学試験 11月

合否判定結果通知 12月

大学による入学前指導（オリエンテーション） 冬季休業中

大学入試センター試験（前期日程で要する教科・科目は必受験）

大学による入学前指導 2月

講座による各合格者に対する個別課題で、主に、専門分野に関する書物を読んで、ブックレポートを作成する。

本校による入学前指導 2月～3月

愛知教育大学附属小学校、中学校及び特別支援学校を訪問し、行事において児童と交流したり職場体験学習を行ったりする。大学入学前のこの時点で、小学校、中学校、そして特別支援学校での体験学習を終えている。

第2回高大連携交流会 2月

高大連携特別推薦入試で愛知教育大学へ進学した学生と志願者との交流会

高大連携選抜入試合格者発表会

合格者による2年生へのプレゼンテーション

「スクール」「チャレンジ」等で学んだ事柄について、2年生「スクール」受講者へ学習内容を発表する。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

① 地域性

本校は、自動車産業が盛んな愛知県三河地区にあります。生徒の通学範囲はほぼ愛知県全域ですが、地元の刈谷市、豊田市、豊明市、みよし市及び知立市から通学する生徒が、全体の70%近くを占めます。その意味では、地元に着した公立高等学校としての性格も帯びているといえます。また、入学時の進路希望は愛知教育大学への進学が最も多く、中学生のみなさんや保護者の方々も本校へ寄せる期待の高さを強く感じています。

今後は、ものづくりが盛んな地域的背景、愛知教育大学が掲げる「科学教育研究活動等を展望した高大接続」の方針を踏まえて、理数教育を中心とする高大連携を意識した特色づくりを推進したいと考えています。その点、「高校－大学連携教育システム」や「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」への参加は、本校が大切にしなければならない取り組みです。特に、高大連携教育における「スクール」の意義は大変大きく、1年生の大学研究室訪問とともに、今後の高大連携のあり方についての提案になるものと考えています。

② 人間性

本校の校訓「あたたかい人間になろう」には、自己を見つめ他者を理解し、周囲の人を大切にすることで、人を支えることを誇りとする人になってほしいとの願いが込められています。また、「たくましい人間になろう」は、課題を発見しその解決に粘り強く取り組むことを通して、精神的に自立した人になることを求めています。さらに、「おおらかな人間になろう」は、コミュニケーションを通して多様な価値観や文化背景を有する人々と協働することで、社会との接点を見だし、自己有用感を高める人になることを目指すものです。

産業の機械化やIT化が進む中で、ものづくりの主体であり、機器を操作する主体である人としての資質が今まさに問われています。本校の校訓は、この地にある学校として、そして愛知教育大学の附属学校として、社会のグローバル化までをも見通した校訓です。校内での学習と校外での学びが一体となり、校訓を実現する生徒を育てることが本校のミッションだと考えています。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

愛知教育大学の敷地内に位置することが、本校の最大の魅力です。登校時から部活動を終えて帰宅するまで、四季折々の大学の様子を感じることができ、生徒は大学という存在を常に意識しながら学校生活を送っています。このような中で、高大連携教育を行い、これまで100名以上の生徒が特別推薦入試で愛知教育大学へ進学しました。また、「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」においては、愛知教育大学の先生方に専門を活かした支援をお願いしています。高大の連携とは単に施設の相互利用にとどまりません。そこには、必ず人と人との交わりが必要です。

平成27年度の「1年生大学研究室訪問」では、ある研究室において「よい授業について」というテーマで愛知教育大学の先生と本校生徒との間で意見交換を行いました。意見を付箋紙に書いてまとめていく中で、生徒は「生徒主体で、生徒が考える授業」が最も大切という結論に至り、大学の先生からはその場で高い評価をいただきました。このような学びが日常的にできるところが附属学校の特色です。フェイス・トゥ・フェイスの交流活動を基に、将来的にはオンラインによる様々な活動形態を提案できる学校として、本校の可能性は計り知れないものがあります。今後も、高大連携のあり方について、新たな提案を模索したいと考えています。